

H28年度第1回宇治市小中一貫教育推進協議会会議録

|  |  |
|--|--|
| 会議名  | H28年度第1回宇治市小中一貫教育推進協議会   |
| 日時   | 平成28年7月29日（金） 18時00分～20時00分  |
| 場所   | 宇治市役所 5階 501会議室  |
| 出席者  | <p>（委員） 榊原会長 薮副会長 船川委員 中本委員 内田委員<br/>松井委員 石田委員 井戸委員 天花寺委員</p> <p>（事務局） 石田教育長 澤畑教育部長 伊賀教育部副部長 藤原参事<br/>瀬野センター長 富治林教育支援課長 金久一貫教育課長<br/>井上学校教育課長 縄手教育総務課長 市橋一貫教育課副課長<br/>辻一貫教育課総括指導主事 青木一貫教育課教育指導係長<br/>姫野一貫教育課指導主事 大越一貫教育課学校教育指導主事<br/>河野一貫教育課学校教育指導主事</p> |
| 配付資料   | <p>H28年度第1回宇治市小中一貫教育推進協議会資料<br/>H28年度中学校ブロックジョイントプランー小中一貫教育推進計画ー</p>   |
| <p>1 開会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・石田教育長 開会挨拶</li> <li>・各委員自己紹介</li> <li>・事務局自己紹介</li> <li>・設置要項に基づき会長に榊原委員、副会長に薮委員を選出</li> <li>・榊原会長挨拶</li> <li>・薮副会長挨拶</li> </ul> <p>2 報告及び協議事項</p> <p>（1）報告1 平成27年度宇治市小中一貫教育推進協議会の活動概要<br/>資料6頁に沿って事務局より説明</p> <p>（会長）<br/>27年度の推進協議会活動概要について報告・説明を受けたが、新しい委員から「どういうことか」という質問や、昨年学校の取組視察に行ったがこんな感じだったという報告や追加説明はないか。</p> <p>（委員）<br/>11月12日の木幡中学校への体験入学を参観した。小・中学校の子どもたちが双方ともきちんと動いていた。その陰で、小学校と中学校の先生方が連携して、子どもたちが中学校に入学するに当たって様々なことを考えておられた。<br/>もうひとつは、木幡中学校の秋祭りで『おもろいやんか木幡』をやらせていただいているが、そこでも小中一貫教育の取組を保護者の皆様に聞いていただく場を中学校と連携して作っている。その中で、「保護者の方にも段々わかってきていただいているな。」という感想をもっている。</p> <p>（委員）<br/>私は初めてのことでわからないこともある。各委員は、2学期に学校の取組の視察に行かれているが、どんなことをメインに視察しているのか気になる。<br/>それと、中学校になると複数の小学校から子どもたちが集まってくる。それぞれの小学校から子どもたちが交わっていく過程で、中学校はどんなことに取り組んでいるのかも気になる。</p> |  |

(委員)

私は、去年、一昨年と、2回視察している。

最初の年は、東宇治中ブロックで、6年生が中学校の部活を見学する半日体験を見学した。6年生が中庭に集まって来ると、生徒会の中学生たちが、「〇部を見学したい人たちはここ」「〇部の人はここ」と、指示を出している。6年生は小学校で見るとすごいお兄さん・お姉さんなんだが、本当に可愛らしい感じで言うことを聞いて、体育館へ行ったりグラウンドへ行ったりときちんとできている。そんな様子を見ているともものすごく頼もしく感じた。

去年は南宇治中学校へ行った。国籍の違う子が何人かいるため、小学校で日本語教育を行っている。保護者にも日本語学習の時間があるから来てほしいという取組もしていた。中学校では、「中国武術」の部がある。小・中学校の先生が多く集まり、雰囲気もすごく良かった。かなりのコミュニケーションを取っていないとあそこまではできないと感じた。2つのブロックとも小・中学校の先生がそれぞれ頑張っていると感じられた。

事務局が案内してくれたので、疑問に思ったことをその都度問題解決しながら見学でき、スムーズでよかった。

(委員)

私は、西小倉中ブロックだが、事前に校長先生から「事後研」(公開授業の後の先生方の反省会・研究会)の様子を是非見てくださいとお話があった。それに注目して行かせていただいた。そこで、小・中学校の先生方が授業の振り返りをする中でかなり活発に意見のやりとりをされていたのが印象的だった。また、小学校の文化と中学校の文化を上手にすり合わせるような話し合いがなされていたのが、保護者としては「安心できたかな」という感じで見学させていただいた。

(委員)

私は、榎島中学校ブロックに行かせていただいた。昨年度から言わせていただいているが、榎島小学校は分散進学という形の学校になっているので、そこを中心に学校の先生方の取組や、どういう考え方をされているのかを見せていただいた。お話を聞く中で、分散進学ということをしつかりと意識された形での取組を考えていただいていると、視察の中ですごく感じさせていただいた。

## (2) 報告2 平成27年度小中一貫教育の取組到達状況報告 資料7頁に沿って事務局より説明

(会長)

交流活動とか行事も大事だが、授業が学校教育の柱であることからすれば、「系統的・継続的な学習指導・生徒指導」に関わって、委員の意見や事務局の考えを出していただけるとありがたい。

小学校・中学校それぞれに目標や課題があり、子どもの年齢も当然違うということを考えると、小・中学校の先生方が授業の後、議論を交わすのは大事なことであり、恐らく小中一貫教育の最初の頃であれば、まず使っている言葉から違うというぐらいのギャップもあっただろうと思う。

ただ、「系統的な指導」ということから考えると、小学校の「ものの見方・考え方」と中学校のそれとは、かなり難しいところがあると思う。小・中学校の先生方が、授業に関わる準備や実際の授業、事後の検討会をどう進めているのか、「これからこう変えていこう」「こうしていこう」というような中身についてご意見を伺いたい。

小学校の授業と中学校の授業が無関係じゃいけないのが大前提だが、その上での難しさとか、このあたりにうまく関わることでより良くなるんじゃないかというアイデアや考えはないか。

(委員)

今日も中学1年生の「振りスタ」に参加し、小学6年生の算数の復習をした。「割合」の指導について中学校の先生から、「小学校では、どういう考え方で教えているのか?」と聞かれ、小学校では立式の前に「簡単な図をかき」と説明すると、「なるほど。そういうことか」と理解された。中学校ではそのまま立式する。そのような差異を議論しながら、中学校の教師は、小学校での指導

内容と方法を踏まえて指導しよう、小学校の教師は、中学校での指導内容と方法を前提に、できる部分は中学校に近づけようというスタイルに持っていければと思っている。

(会長)

一旦事務局にお返しするが、「系統」というのはどんなイメージで考えているのか。

(事務局)

かつては、各教科の「年間指導計画」を小中別々に作成していた。小中一貫教育の推進を視野に入れた段階では、義務教育9年間の円滑な接続に配慮した年間指導計画を作成しようとして小中合同でのカリキュラム作成委員会を持って意識の共有化を図っている。より系統的・継続的な学習指導ができるよう「年間指導計画」(宇治スタンダード)を作成し、各小中学校が授業実践を重ねていることがまず基本としてある。

今年度も8月に各ブロックで小中合同の研修会が持たれる。小中一貫教育というシステムはあるが、実際にそれを進めていただくのは最先端に立っている先生方であり、その先生方の中でしっかり議論していただきたい。小学校と中学校には、教え方が違う、式の書き方が違うということもある。小中学校の教員にそれぞれの考え方があり、一致点は見い出せないが、差異部分を意識しながら実践して、「ここは改善が見られた。」「ここは残念ながら想定どおり無理だった。」という話ができる研修会が持てるようになれば、よいと考える。

(委員)

小中の教員が、互いの授業を見て話し合うことは、どのブロックでもよくやる研究会の形である。小学校の授業は丁寧に時間をかけ、主発問にみんなが手を挙げて発表し、子ども同士グループで話し合う。講義調でやると子どもたちが全然ついてこない状況が小学校。

中学校は教科担任制なので、講義調にならざるを得ない状況もある。小中教員互いに、「もっとこうしたら、ああしたら」という協議が盛んに行われていると思っている。

本校では、小学生がそのまま中学校に上がるので、グループで話し合うとか、先生が発問した時にみんなで手を挙げて答えて授業が進んでいくのは極めて普通のこと。しかし、中学校に上がった時に、3校4校が一緒になったお互い知らない集団で、授業をとにかく進めていかなくてはならない時に、子どもたちに意欲的に何か発表させようとか、グループ活動させようとする時の難しさはあるのではないかと思う。

先日中体連の大会があったが、サッカーの大会中に生徒が「〇〇ちゃん」と呼んでいた。それも9年生の生徒が。やはり、小学1年生の時から一緒に、つながりが9年間あるから「〇〇ちゃん」のままで中3に行く。そういう子たちの集団の授業というのは、あまり飾らず格好付けなくていい。どちらかという小学校の授業がそのまま続いていくという意味では、本校では集団で授業を進めるというスタイルが普通にしやすい感じになる。

(会長)

学校毎の特徴もあるとは思いますが、柱として「系統的」が出ていても、実態としてはなかなか難しいなという現場感覚がもしある場合、報告と実感覚とが乖離してしまう可能性がある。そうすると折角の訪問や議論が勿体ないことになりかねないという懸念がある。どういう意味で「系統とか継続」という言葉を我々が理解すればいいのかということ踏まえつつ、何に着目して我々が学校を見せてもらったらいいいのかということにつながればいいと思う。

### (3) 報告3 平成28年度小中一貫教育推進協議会の活動について(案)

資料8頁に沿って事務局より説明

(会長)

昨年度も忙しい中時間を割いて視察に行っていたが、なかなか全体を回ることは難しい。気楽な訪問も含めて、より多く行けるための工夫や背景、こうしたらという提案はないか。それとも、これくらいの回数でいいのではという理解をしているか。

(委員)

自分の近くの学校がどんなことをしているのかももう少し詳しく知りたいと思い行った。今の段階で協議を聞くというのは難しいので、何かの取組をしている時の方が行きやすいし、行きたい。

(委員)

一人で視察に行っているが、一人で行くのは何か心細い。連れ合って行きたい。

(委員)

私も、まとまってどこかの学校へという形も考えることができないかと思う。

(会長)

学校としては、「いつでも来てください。」という感じだと了解してもいいのか。委員にとっては、学校に行くのは敷居が高いという意識がある方もいるかもしれない。1回行くとなると、「しっかり行く」というイメージが強いのか。「短時間でもいいですよ」みたいな感じか。

事務局の方で、「こういうのはどうか」という提案はあるか。

(事務局)

昨年度は気軽な参観等がなかった。各校・各ブロックの取組スケジュールを各委員に発信するタイミングが遅れたのも一因だと反省している。また、今年度は、各校の取組をジャンル別にする等もう少し整理しようと思っている。

また、委員が訪問可能な時間で参観できるように、学校にもお願いしたい。

(委員)

初めてなので、取組の視察をどんな流れで行うのか把握できていないが、時間が一定必要なのかなと感じた。事前にアポイントを取って行くのであれば、行きづらい。提示された取組スケジュールの期間はいつ来てもいいということであれば、いくつかの学校を見に行けると思う。実際そのあたりはどうなのか。

(会長)

学校がどうぞと言ってくれるのなら、事務局の案内無しに委員だけで行ってもかまわないと思うが、少し気軽に見に来ただけどというのは、事務局としてはどうか。

(事務局)

その日時間がとれたのでという形で学校を訪問していただくと、学校としては若干辛いと思う。数日前にはアポを取りながら実施させていただきたい。

(会長)

では、学校にも早めに取組予定を事務局に出していただいて、我々がより理解しやすいように、より見やすいように整えていただくということをお願いする。

数値目標みたいだが、1人2校は行きたい。昨年のは倍になる。無理にとは言わないが、気軽な方も合わせてできるだけたくさん訪問したい。

(4) 報告4 平成28年度小中一貫教育の取組について  
資料(9頁～)により事務局より説明

(会長)

チーフコーディネーターという立場で、これはできそうだが、これは難しい。位置づけや働き方を変えていったらいいのではないかという意見はないか。

(委員)

昨年度の課題として、学力向上や定期テストへの不安の解消がある。今までやってきたことにリンクさせて何か取り組めないかと思って、今年2つのことに取り組んでいる。

25・26年度に「家庭学習」の研究指定を受け、ブロックで取り組んだ。その時に、家庭学習の習慣をつけようと「家庭学習週間」を作った。中学生が定期テストに向けて勉強する定期テスト1週間前を「ホットウィーク」と名付け、小学生も家庭学習を頑張ろうと呼びかけ、各家庭への啓発を行った。

また「ホットウィーク」を利用して、6年生限定の中学校の定期テストに似たような取組をしようと考えている。この取組が、中学校に行った時の不安軽減にならないかと考えている。2学期の「ホットウィーク」の前に中学校の教師に、中学校ではテスト前1週間は子どもたちが計画を立ててテストに向かっているという話をしてもらおう。中学校では「テスト計画表」を作らせているが、小中の教師が検討しながら小学校版を作っている。それを活用して、「ホットウィーク」の時に自分たちで計画を立てて、1週間勉強してテストに向かうという取組を考えている。

(会長)

活動も素晴らしいし、当事者・進め役としては難しいと思うが、こういう風にしてもらうともっと動きやすいとか、言いにくいけど「これはたまらんなあ」とか、言える範囲でないか。

(委員)

他にもいろいろ取り組んでいるが、実質移動して議論しなくてはならない。中学校の担当は担任なので、必ず放課後になる。時間の制約がある。そのあたりが進めていく立場としては難しい。

(会長)

「小さなことから省力化」とか、「少ない支援で多くの効果を」とか考えると、頑張っただけでは一本調子になる。内容的に個人情報とか保護を必要とするものでないのであれば、例えばスカイプとかネットを使ったもので話をするというのはどうか？

(委員)

昨年度、公務パソコンが1人1台入って、メールでやりとりできるようになった。これからは、そういうものも必要だと思う。

(委員)

中学校ブロックの推進体制の充実という柱の中で、「教頭の役割を明確にし」という文言が出てきているが、具体的に教えていただきたい。

(事務局)

推進体制の組織図の所に、校長とコーディネーターの名前が出ているのは全ブロック共通だが、教頭の名前が出ていないブロックもある。書面上のことだとは思いますが、もう少し教頭にも前面に出ていただきたい。教頭の激務は充分承知しているが、あえて今年度はそう示しお願いしている。

(委員)

実際、今までもご苦勞していただいている。更にもっと前面にと理解したらいいのか。

(会長)

学校間連携なので、中心は校長になる。組織として混乱はしないのか。

(事務局)

実際のリサーチは、この夏の研修会等で教頭と直接話をしたいと考えている。校長・教頭から、この部分で混乱するという指摘は今のところないので、取組をどう進めていくか今後リサーチをかけたと思う。

(会長)

お二人の校長先生はどう考えるか。

(委員)

教頭が校長と同じような動きをしていたら、結局混乱すると思う。西宇治ブロックでは、「領域3部会」という部会をもっているが、3校の教頭にその領域の1つの部会の指導助言をしてもらうように組織として明確に示し、その下にコーディネーターが付いて動くという状況にしている。

(委員)

榎島中ブロックの時には、「夢未来会議」という校長・教頭・コーディネーターの会議をしていた。その会議では、教頭は校長がいると少し引いて話を聞いているようで、あまり目立たないイメージがある。ブロック校長会の内容を教頭が各学校で役割分担して指示を出すのが、教頭同士のつながりがあまり見えてこないと感じながら、「教頭の役割を明確にし」という部分を見ている。

(委員)

全面実施から5年目。その成果を子どもたちに光を当てて見てしまいがちだが、先生方は疲れていないか、ということも心配になる。そんな中で教頭の名前が出てきて、どんどん負担が大きくなっていくと、結果的には子どもたちにとっていいことではないという懸念も若干あるということで質問させていただいた。

教頭を表舞台に出すのであれば、コーディネーターをもっと増やせないか。

(委員)

チーフコーディネーターの「後補充」という教員を配置していただいているので、引き続き配置していただきたい。

(委員)

ブロック内での「小小連携」は、非常に重要である。同じブロックの小学校6年生の担任同士が、どんなことを教えて、どんなふうに通の課題をもって中学校に送れるか。これは本当に大事な課題だと思っている。小小連携も小中連携と同じくらい難しい。場所が違う。校長も職員も全部違う。この小小連携ができないと、中学校にとったら、「バラバラやないか。」「どうなってんのこれ。」ってなる。そうなると中1の指導がしんどくなる。その点で、チーフコーディネーターが大きな役割を担っている。そのチーフコーディネーターもほとんどのブロックで教務主任が担当している。どの教務主任も精一杯状態の中で仕事しているので、宇治市は「後補充」の教員を配置して、チーフコーディネーターが役割を果たすことができるようにしてくれているので、「後補充」が無いと苦しい。小中一貫教育というのはプラスαの仕事だと思っているし、それによって児童・生徒を変えていくということなので、プラスαの意欲が湧くような施策をとっていただければ非常にありがたいし、是非続けていただきたい。

(会長)

「連携」とか「一貫」という言葉を使うが、「小小の連携」という意味合いは、横のつながり方・関わり方で、「小中」というのは、時間軸でいうと縦のつながりということになる。それをもっと広げると、こういう話をよく聞く。

ある学年の担任が、いわゆる「厳しめ」の学級経営をして、「手の上げ方」や「発表の仕方」、「給食の配膳」等を意識的に厳しく指導し、その1年間はその先生の力量でもった。次の年、その先生は転勤して他の学校へ行った。子どもたちはそのまま次の学年に上がった。次の学年の担任は、どちらかと言えば「ゆるやか」で、子どもたちに任せるといった感じでやった。そうすると、1年前の反動で学級崩壊という状況になった。

学級経営の考え方でいくと難しいが、中学校からすれば、6年生の学級の在り方について、学級生活の基本原則のようなこと、こういう形で中学1年生を迎えたいから小学6年生ではこのあたりは揃えてもらいたいだろうと思う。同じ小学校でも複数組あると結構カラーは違うんじゃないか

とも思う。ある程度足並みを揃えて中学校に送ろうと先生方にもメッセージとして伝えることを考えていただきたい。

(委員)

小中連携の話を伺う中で、ブロックの取組が各学校によって格差というか意識の違いがどれくらいあるのか質問させていただきたい。

宇治黄檗学園は小中合同なので、小中一貫教育についてはスムーズな考え方ができると思うが、分離型や分散型では取組に差が出ないのかと考える。「ホットウィーク」の話を先ほど聞かせていただいたが、あれはすべての学校で取り組まれているのか。

(委員)

宇治ひろの学園は1中2小で、2つの小学校がすべて同じように取り組んでいる。先ほどの「小中連携」も、総会と夏季合同研修会の後で、2小学校のそれぞれの学年の担任が集まって、指導法とか足並みを揃える感じで行っている。「ホットウィーク」も学年全体で取り組んでいる。

(委員)

それは広野中ブロックで取り組まれていることで、他のブロックではまた全然違うのでは？

(委員)

他のブロックでもそのような形で最近取り組んでいるところが増えてきている。宇治ひろの学園は全市的に実施する前から小中連携に取り組んでいたもので、できるだけ宇治ひろの学園の取組を紹介するという形で他のブロックでも取り組んでいただいている。

(委員)

他のブロックを含めての会議がもたれているのか。

(委員)

コーディネーターの会議を、4月と3月に行っている。

(委員)

その中で各校の取組が紹介され、できるだけ足並み揃えてという感じか。

(委員)

同じ方向ということで、良い所は取り入れさせていただいている。

(事務局)

取組の差というと、立地条件等があるので、当然若干の差はあると思っている。ただ、小中一貫教育の取組によって教員のつながりが変わったのは事実である。以前の様々な会議では、小学校の先生と中学校の先生とはよそよそしく見受けられた。昨今の会議では、全体会からブロック会議になると一瞬にしてテーブルを動かして話を始められる。以前とは大きく変わっている。ブロック訪問した時にも、コーディネーター同士が話している姿に、小中一貫教育がプラス面に作用していると感じる。そんなコーディネーターが中心になって取組を進めているので、どのブロックも前向きに取り組んでもらっていると考えている。

(委員)

私は笠取小だが、学校にはよく伺っていろいろと気安く質問したり話したりしている。先日訪問した時に、木幡中学校の先生と出会い、笠取小にもよく来られていると聞いた。

また、先日木幡中ブロックの地域懇談会があった。保護者の方から、「小さい笠取小学校から大きな木幡中学校へ行って、子どもたち大丈夫ですか？」みたいな話が毎年出ていた。毎年出るから、そのような質問が出る前に先生から説明していただいている。また、岡屋小から東宇治中に進学す

るという保護者の方が、初めて木幡中ブロックの地域懇談会に来られた。「分散進学だから初めて木幡中ブロックにも参加した。」とおっしゃっていた。いろいろお話を伺いながら、これも一貫教育のよい影響かなと思った。

(委員)

家庭・地域との連携という観点では、民生委員をしている関係から、小さなお子さんのいる親御さんと接することが多い。普通は広野中学校とか大久保小学校とか呼んでいるが、「ひろの学園って何ですか？私立ですか？」とよく聞かれる。「公立ですよ」と答えるとびっくりされる。小さなお子さんのいる親御さんまではまだ浸透していない。学校便りは地域にも回覧板として回っているが、小さな子のいるマンションとかにも回っているのかなと思う。

(委員)

一貫教育については、今回連合育友会の副会長をさせていただく中で知ったことがたくさんある。2年前には菟道小学校育友会の副会長をさせていただいたが、その時には、こんな取組をしているとはあまり知らなかったのが実情だった。自分の子どもが学年を重ねても、小中一貫の取組をしていると実感する機会が少なかった。学校便りにも出ていたと思うが、そこに目を向けようという意識を持っていなかったのを見落とししていたと思う。

私は仕事の関係でネットにつながっている機会が多いので、ホームページを含めて1回でも目につくともっと見ようという気になる。そういう知れ渡る何かの形があると非常に嬉しいと思う。

(委員)

他の学校でもそうだろうが、菟道小でもある1人の先生が子どものことを学年を超えてよく知っている。学校にはまだ入っていないけど〇〇君の弟さん、卒業された場合には〇〇ちゃんのお兄ちゃんって具合に、先生と一緒に地域を歩くとよく出合う。それは、保護者としては安心できる。

それが中学校の先生がどこまで把握できるかとなると、人数も非常に多いので難しい。そういう意味では、情報を交換したり、何か気になった時には尋ねたりできるような関係が作れるのであれば、何かあった時には小学校に聞いてもらえるんだとか、先生同士で、小学校の時にはこういう対応をしていたと伝えて、中学校でもうまく対応してもらえるんだったら、保護者としては嬉しい。

#### (5) 報告5 小中一貫教育のアンケートについて 資料(13頁～)により事務局より説明

(委員)

15ページの「小学校6年児童用」の(2)の所を見ると、質問内容も「心配や不安」について書かれてある。「心配か不安か」と問われれば、「心配や不安」になると思う。例えば、「中学校での友だち関係について心配(しんぱい)や不安(ふあん)に思う。」というところを、ちょっとネガティブなイメージの言葉になっているので、「中学校で新しい友だちが作れることを楽しみにしている。」といった前向きな表現にすると、子どもたちの答えも変わってきたりしないかと思う。

地域懇談会に参加した時も同じだが、懇談とか質問とかになると、どうしてもマイナスな部分が出てきたりする。保護者として参加する時には、この地域の何が誇れるのか、どんなところがすごく良いのか、といったマイナスな話以外を聞きたい。宇治中校区は他と比べてこんなところが良いんだとか、何年か前にはあいさつの声が全然なかったけど、今ではあいさつがどんどん増えてきたといった、前向きな話が聞けると嬉しいと思う。

アンケートの質問を見た時に、「心配か不安か」と言われれば、心配や不安がない子はいない。不安感よりも少し気持ちが高まるようになった方が良いと思って、そこだけが少し気になった。

(会長)

リード文の作り方によって回答傾向にも違いが出るという可能性も排除できないと思う。無記名だから難しいとは思いますが、あえて言えば、どういうタイプというかグループに属する子ど



もたちが不安を感じているのか、逆に言うと、別のグループの子はそうじゃないとか、そこがよりわかれば、施策上はそこに焦点を当てて学校の活動を考えると、指導を考えるとかになると思うが・・・結局子どもを特定することになるから望ましくない面もあると思うが。

何年もアンケートを取っている中で、その中での変化というか、小中一貫教育に馴染むというか浸透してきているのが確かめられるという理解でよろしいか。

本日予定の協議事項は以上だが、5年目という節目でもあり、小中一貫教育を活性化していく、間接的にでも小中一貫教育の推進に貢献していく上で、言っておきたい、あるいは、聞いておきたいことはないか。

(委員)

昨年も質問させていただいたが、国の「義務教育学校」の件だが、その時はまだ情報不足という回答だったが、その後何か調査・研究が進んでいるか。

(事務局)

まず、「義務教育学校とは何か」ということを簡単に説明させていただく。

昨年度まで義務教育には、小学校、中学校という「くくり」があった。それに加えて昨年度法が公布され、平成28年4月1日より、小学校から中学校までの義務教育を一貫して行うという「義務教育学校」が新たな校種として設定された。現在、「小学校」「中学校」「義務教育学校」という3種類の校種がある。宇治市等の市区町村には、公立の小学校・中学校の設置義務があるが、「義務教育学校」にした場合、その設置義務も「義務教育学校」設置によりクリアとなる。

今年度4月1日で義務教育学校にしたところは全国で22校あった。その22校を精査すると、「合併に伴う学校規模適正化」を図ったものが半数以上であった。併設型の小学校・中学校もあるが、義務教育学校にしてのメリットは、教育課程上、小学校で教える内容を中学校へ移行したり、逆に中学校で教える内容を小学校へ下ろしたりできるという点があるが、途中での転校等を考慮すると実情は困難と考える。義務教育学校にすると教員の増員があるとか、財政面での措置があるという面では今のところメリットとして何もない。そういう部分も鑑みて、本市の小中一貫教育にとって義務教育学校や併設型等に移行していくことが、小中一貫教育を推進する上でプラスαになってくるのかということも充分精査した上で協議をしていきたいと考えている。

(委員)

先生方の配置とか全くわからないので質問するが、先生方というのは基本的にはある小学校や中学校に所属すると、別の小学校へ行って何らかの形で授業をすることはできないものなのか。

(事務局)

菟道小学校の教員が菟道第二小学校へ行って授業することは、基本的にはない。

(委員)

義務教育学校の話の中で、地域の連携等を含めたことを考えると、先生方が所属はあってもいろいろ移動していくと、その学校その学校のことがよくわかると思った。先生の負担は度外視して、そういうことが制度上含めてできるのかどうかわからなかったので質問させていただいた。

(会長)

かなり限られるというのが実際のだが、制度的には「兼務発令」というか、専科系の教科、例えば美術や音楽等、所属校での授業時数がそれほど多くない方が他の学校でということはある話だと思うが。

(事務局)

補足だが、本市が雇用している「教科連携教員」は、Aという中学校に籍を置きながら、校区の

小学校に教えに行くとか、自分の所属する学校ではないところに出向いて授業することはある。だが基本的に、A小学校からB小学校へ行くとなると実際には授業をかなりもっているので、移動を含めた時にほぼ現実的ではない。連合大学のような仕組みには、義務教育はならないと思う。

(委員)

小学校の先生は小学校の免許を持っていて小学生に教える。中学校の先生も同じ。その学校の免許がないと教えられないと聞く。宇治黄檗学園は、小学1年生から9年生までいるが、小学6年から7年に上がる時、やはり中学校の先生が教えることになるのか。

(委員)

宇治黄檗学園は小・中学生と一緒に生活しているので、兼務発令をされている。廊下ですれ違う時には、小中学生どちらへも指導はできるが、教科指導はできない。その校種の免許がないと基本的には教科を教えることはできない。

宇治黄檗学園の場合は、中学校の免許を持っている小学校の教員を中学校へ送る人事交流はしている。今まで4人、宇治小学校の担任を中学校の教科担任へ送っているし、今年は、小学校の免許を持っている中学校の教員を、9年生から小学校へ下ろしている。

(会長)

以上の協議をもって本会を終了します。

(事務局)

今後の推進協議会の日程について説明

### 3 閉会

澤畑部長より閉会の挨拶